

ピアニストからみた 室内楽入門

最終回

ピアニストと室内楽

深井尚子●ピアニスト



Shoko Fukai

ウィーン市立音楽院修了。ウィーン古典派をレパートリーを中心に演奏活動中。特にベートーヴェンを深く研究しており、学術論文多数。ベートーヴェンピアノ・ソナタのCD第1集、第2集は好評発売中。色とりどりの小品集ハイドン、ベートーヴェン（ヤマハミュージックメディア）の校訂解説の楽譜も好評。現在、北海道教育大学音楽コース准教授。所属の「メビウストリオ東京」は、ヨーロッパ公演が行われ、好評を得た。



1年間の連載も今回が最後になりました。室内楽は、貴族の邸宅やシューベルティアーデなどに代表される、親しい友人たちが集まって音楽を楽しむという形式から始まりました。現代はホールでのリサイタルなどが一般的になり、本来の意味における室内楽の雰囲気を感じることは少なくなっただけではないかと思えます。特に日本では住宅事情もあり自宅にサロンを持つことも現実的ではないため、室内楽もホールで聴くのが一般的ですが、ヨーロッパでは今でも元貴族のサロンなどで親しい友人たちが集まって、室内楽を楽しむ機会があります。今回取り上げたピアノトリオは室内楽の最小単位なので、メンバーも集まりやすいと思います。ヴァイ

オリンの代わりにフルート、クラリネット、オーボエなども応用できます。この連載から、みなさんが気軽に室内楽に親しめるようになればうれしく思います。

ピアノを含む室内楽での一番のポイントは、ピアノと弦楽器のバランスです。お互いの楽器の特徴をよく知り、ざっくばらんに音楽について相談できることが、良いアンサンブルができる秘訣だと思います。またピアノは同属の楽器はなく、ピアノ唯一の音色を持っているということを、私たちピアニストは忘れがちになります。ピアノは唯一無二の楽器で、オーケストラの音域をすべて持ち、和声を10本の指によって豊かに響かせることができます。そして、ただひとりで演奏する

ことが普通です。そのため、アンサンブルになった時にピアノだけが浮いてしまったり、逆に萎縮してしまったりすることがあるのです。今回の連載でお話ししたかったことは、この点です。ピアニストも、自分の楽器の特徴を弦楽器奏者にも伝えたり、またアンサンブルの際のピアノの役割を、客観的に聴くことができる能力を身につけることが重要です。

今まで、ハイドン、メンデルスゾーン、ブラームス、チャイコフスキー、ドビュッシーの具体的な楽曲を取り上げながら、ピアニストと弦楽器奏者とのアンサンブルについてお話ししてきました。名曲といわれ演奏機会の多い楽曲を取り上げましたが、これらの曲はピアノトリオの定番で、一般に大変愛好されています。その理由は、第1テーマなどのメロディが覚えやすいこと、ロマン派以降、楽器も発達し、弦楽器の取り扱いの方法も豊かになり、各楽器が対等にアンサンブルを行なえるように書かれることになったことで、重厚で深みがある楽曲になっていることだと思います。

この連載でピアニストたちも積極的に室内楽を行い、アンサンブルの楽しさを別な角度から楽しみ、ソロの演奏にも役立てていただければうれしく思います。また誌面でお目にかかれず、楽しんでいただいています。(終)

イラスト：吉田しんご